イエナのイエナプラン学校訪問　2015年9月9日－9月11日

舩尾日出志

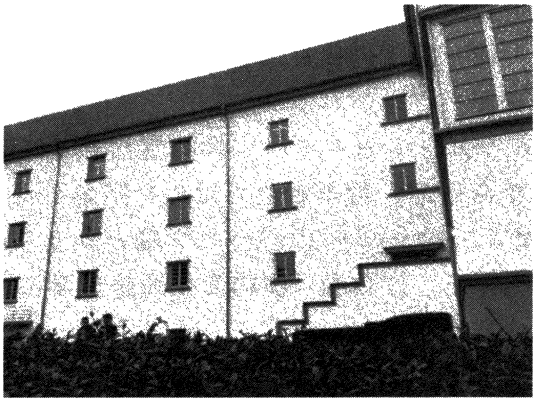
Vom 9. 9. 2015 bis zum 11. 9. 2015 habe ich an der Jenaplan-Schule Jena hospitiert.

Hideshi Funao

はじめに

2015年9月、幸運にも2週間ドイツで研修することができた。その際、イエナのイエナプラン学校（以下、“JPS”と表記）を訪問したのは、WEB上に掲載されている同校の教育コンセプトを読んだからである。

9月8日フランクフルト空港駅10時11分発の（ドイツ鉄道の）ICEに乗車し、ワイマル駅で普通に乗り換えてイエナ西駅に到着したのは定刻の13時21分であった。初めて訪れる町、初めて参観する学校はいつもワクワクする。ましてや大好きなドイツの町、ドイツの学校だから余計にである。イエナ西駅から徒歩で2分のところにあるホテル（チューリンゲン・ホフ）で一休みして、JPSの下見をした。ホテルから西に向かって長い比較的急な坂を12分歩くと、校舎が見えてきた。



1．9月9日ー学校見学、もぐらグループ参観

7時半に校長室に来るよう事前に依頼されていた。朝食をホテルで食べる余裕はないので、8日の夕刻にホテルの朝食をキャンセルしていたところ、ホテルのスタッフがお弁当を用意してくださった（早朝、ホテルの部屋のドアノブにかけてあった）。

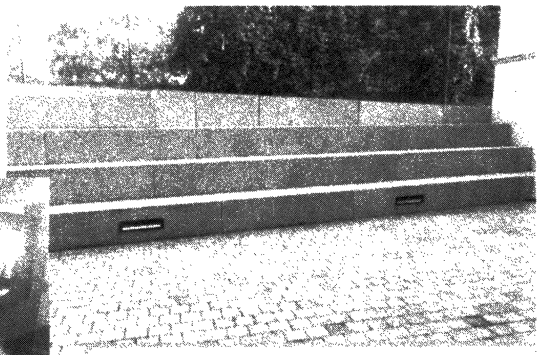
図画工作学習室を案内してくださる校長のフランク・アーレンス先生

坂道を歩いて、JPSの校長室に到着したとき、汗をかいていた。気温は15度ほどであったのに。7時半から9時まで、校長のフランク・アーレンス（Frank Ahrens）先生に校内を一通り案内していただいた。幼稚園段階の子どもたちの部屋、低学年段階の子どもたちの部屋、教職員の憩いの部屋、調理学習室、学校食堂、裁縫学習室、図画工作学習室、図

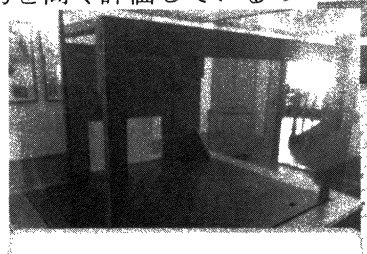
書室、ミニ屋外劇場、さまざまな遊具を備えた中庭を、興味津々で見ることができた。

「ミニ屋外劇場」というのは、校長先生から説明をお聞きして、わたしがとっさに名づけた。わたしには、説明を聞くまでは、校舎と中庭を繋ぐただの玄関としか思えなかった。

劇場であることを知ったとき、わたしは「イエナは確か、ゲーテがシラーと出会った町だった」という事実を思い出していた。シラーは芸術に、特に演劇の教育力を高く評価しているのであった。(10 日後に、フランクフルトのゲーテハウスを見学したとき、そこに人形劇の小さな舞台があることを知った。)

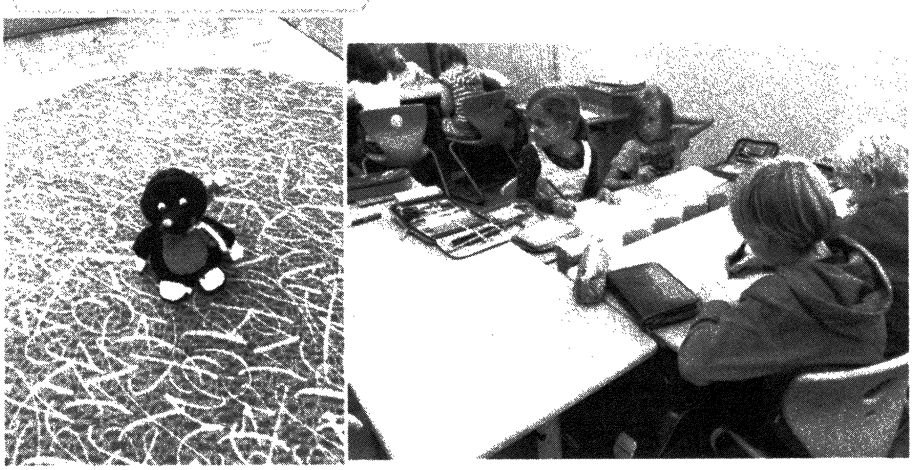


In JPS



In Goethe-Haus

9 時前にもぐらグループの教室に出向いた。ジルヴィア・ホケ (Sylvia Hoke) 先生が担任をなさっている。もぐらグループは 1 年生から 3 年生まで、1 学年ごとにおおよそ 7 名、グループ全体でおおよそ 20 名で構成されている。子どもたちの年齢段階に相応に、可愛いもぐらのぬいぐるみが目についた。すでに国語の授業が始まっていた。1 年生の座席の前だけには紙製の大きな名札がおいてあった。

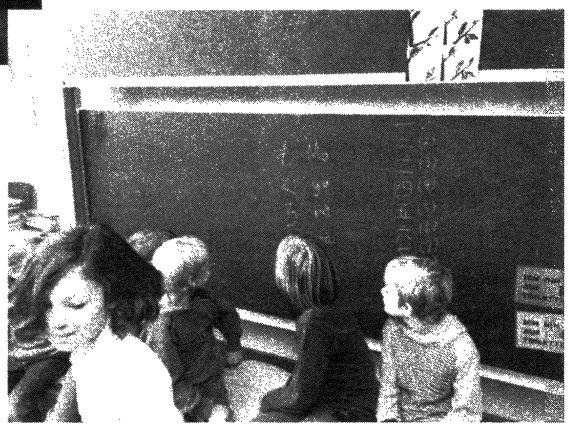


低学年の 3 学年の子どもたちを 1 人でまとめるホケ先生は忙しい。上の写真の左は 1 年生だけを集めて、次の活動を説明 (輪の中にぬいぐるまのもぐらが置かれている)。右の写真は 3 年生に説明なさっている。

指示を受けて子どもたちは座席で、ほとんど自己活動をおこなっている。手前の1年生は、5つずつ描かれたイラストから異質なものを選んで×を付けている。例えば、「ナシ、サクランボ、タンポポ、リンゴ、ブドウ」からは「タンポポ」に、「ブタ、スズメ、ニワトリ、ネコ、にんげん」では「にんげん」に×を付けている。

向こう側の2年生は、「どうぶつ－アルファベット」という課題に答えている。すなわち、ＡＢＣ順に動物の名前を書いていた。ある子どもは AFFE（サル）、Bär（クマ）... と書いてるようであった。

9時45分頃、国語の授業が終了した時点で、子どもたちはホケ先生の指示で歌って、踊った。やはり3年生が上手に踊っていたようである。この後、いわゆる朝食の時間となった。

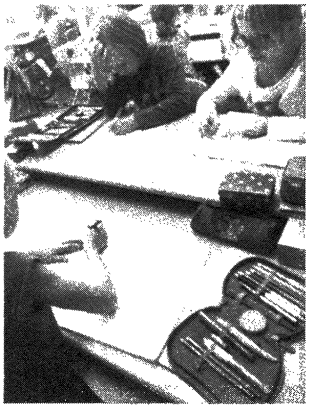


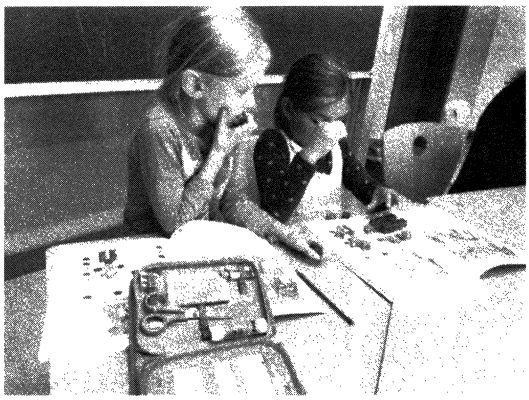
低学年グループの担当先生は、忙しい。ホケ先生は休憩の時間も次の算数授業の準備を忙しくなさっていた。

そして15分後、算数授業が始まった。まずホケ先生は子どもたちを黒板の前に集合させた。先生はわたしに Maulwurf（もぐら）を日本語で、そして1から10までを同じく日本風に書くように指示した。そして一人の子どもに普通に1から10まで書くように言った。わたしが書いた日本語に興味津々の子どももいた。

← 1年生の子どもたちは図形の学習を教具を用いておこなっている。

3年生は計算の練習習をしている。 →





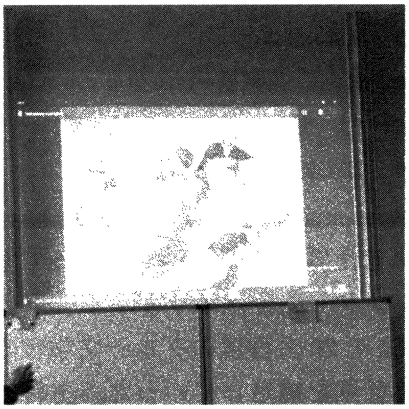
2年生は分類と数をかぞえる学習をしている。左の子どもが右を子どもを支援しているように思えた（上の左の写真）。子どもたちはグループごとに真剣に学びを続けていた（上の右の写真）。

2．9月10日午前ーギムナジウム上級のプロジェクト「歴史」参観

JPS 訪問 2 日目、校長先生に連れられて教室に向かった。ミケ・ブルーン（Mike Bruhn）先生とギンター・ハイケ（Ginter Heike）先生が椅子を並べたり、ホワイトボードを用意したり、プロジェクターの準備をなさったりしていた。

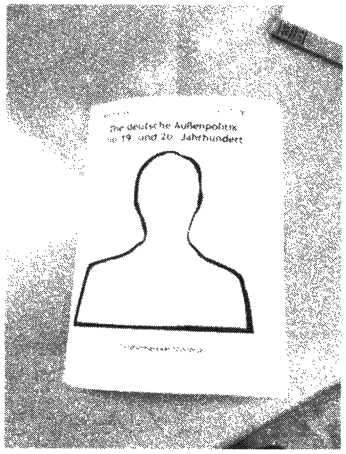
そのうち生徒たちが次々と部屋に入ってきた。1 日目に参観した子どもたちよりも年齢が10歳程度上なので、正直言って、多少威圧された。

椅子の数よりも生徒の数が多く、一部の生徒は窓際、壁際に腰を掛けていた。ずいぶん気楽な様子であった。

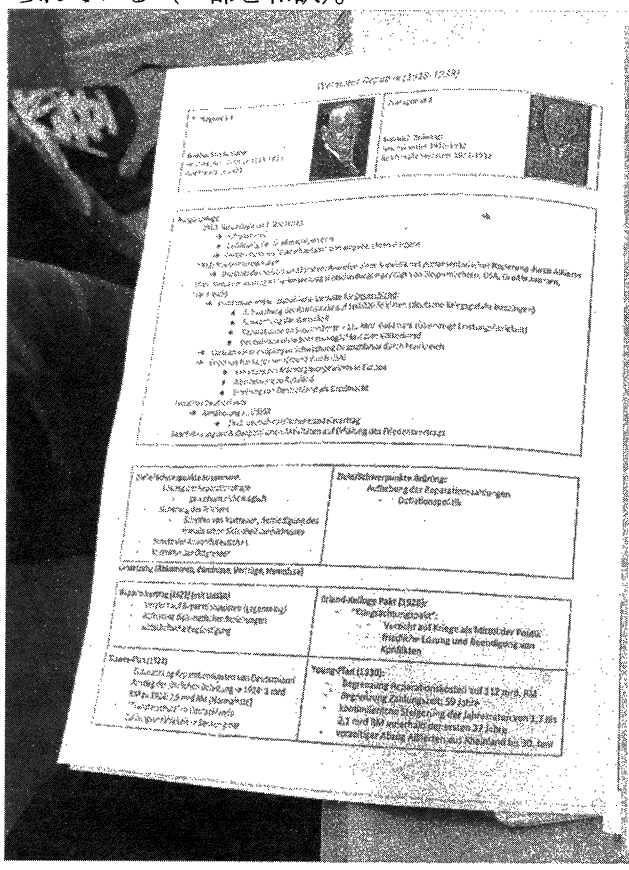


まず 1 枚のスライドがスクリーンに映し出された。なんとドイツのメルケル首相がナポレオンに擬せられた写真であった。フランスの新聞に掲載されたものであるとのこと。ブルーン先生はその意味を生徒たちに問うていた。この写真の解釈や評価は、生徒たちにとってかなり難しいようであった。仮にわたしに問われたとした場合、わたし自身もとっさには答えられなかったかもしれない。肯定的なニュアンスなのか、否定的なものなのか。いずれにせよ、フランスにおいても、メルケル首相が EU のなかでも大きな指導力を有していると考えられていることは確かである。

その後、数人の学生が 20 頁の小冊子『19 世紀と 20 世紀のドイツ外交』を生徒全員に配布した。生徒たちはグループごとに小冊子をみながら話し合いを開始した。



小冊子は見開き 2 頁でまとめられたレジメ集である。下の写真はワイマル共和国期（1918-1933）のものであり、人物としてはシュトレゼーマンとブリューニンクがとり上げられている（一部を和訳）。



出発状況

・1918：第 1 次大戦での敗北

→　戦争の罪

→　大国の地位の喪失

→　激高した市民の「強迫平和」の要求

・1918：11 月革命

→　皇帝と諸侯の退位：連合軍による議会制政府を有する共和国の告示

・1919：ヴェルサイユ条約＝平和条約（アメリカ、イギリス、フランスという戦勝国によって刻印された諸決定）

→　ドイツにとっての領域的・経済的喪失：

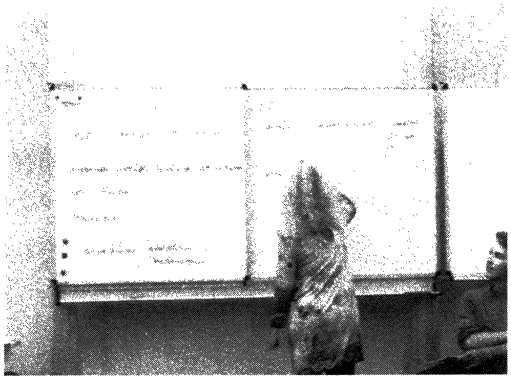
◆　国防軍の 10 万人への弱体化（ドイツによる戦争の危険を排除）

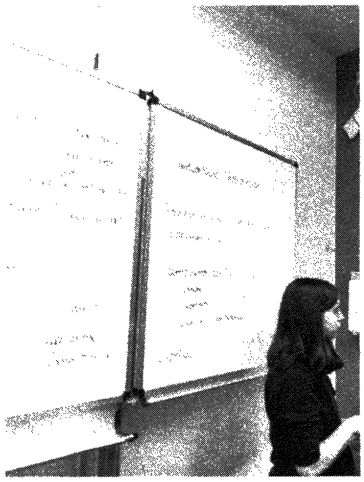
◆　経済の弱体化

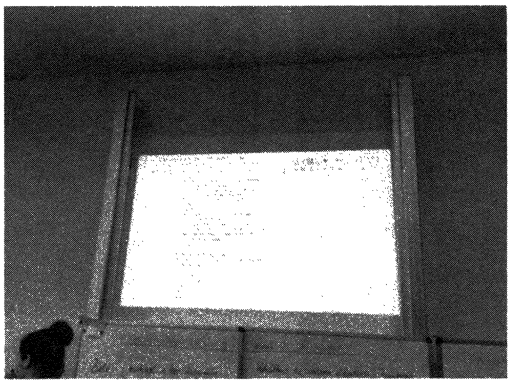
◆　戦勝国への賠償＝1320 億金マルク（実力を超えている）

◆　国際連盟に加盟できないドイツ

生徒たちはグループごとに学びを進めていた。リラックスした雰囲気のなかではあっても、真剣に学習を進めているのが印象的であった。並行してギンター先生はホワイトボードに小冊子をもとに考察を進める観点を記述なさっていた。およそ 20 分程度のグループ学習の後、ホワイトボードに書かれた視点にそくして生徒たちは意見を補足していった。生徒たちは次々と発言し、およそ 20 分ほどでホワイトボードは埋められた。







生徒から意見を聞き、板書するのは生徒である。そして板書された内容はパソコンに入力され、自動的にスクリーンに投影されていた。パソコンに入力するのも、もちろん生徒であった。（板書内容を次に和訳する。）その後、再び1枚の写真が投影され

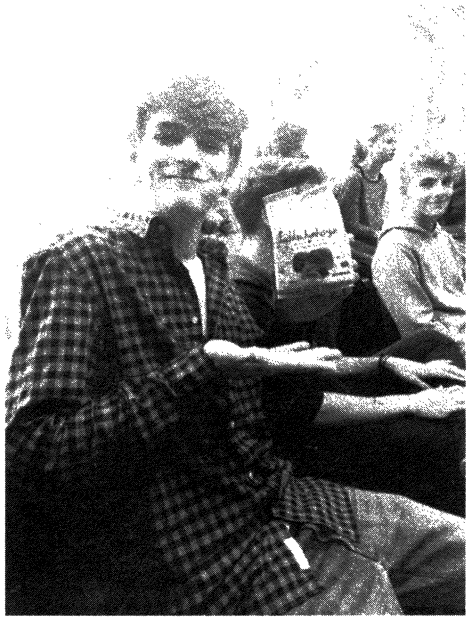
19世紀と20世紀におけるドイツの外交

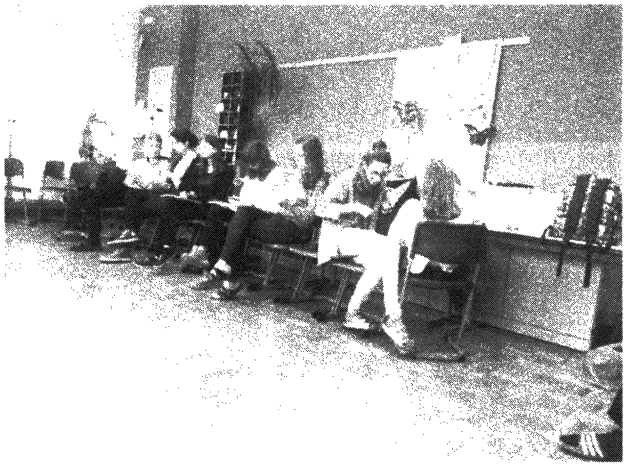
目標（力の政治と領土要求）　実行（拡張的　－　防衛的）　協定／条約および同盟、同盟パートナー
実行（外交的、侵略的...）　ヨーロッパにおける役割（他者像と自己像）　寛容
国家形態
時代状況（政治的でない　→　自然崩壊...）
　ドイツ内の状況
他の国々との関係（フランス、ロシア、イギリス）　ヨーロパ内およびその他の大国との
領域（どのような領域をドイツは包括している）→　地理的状況　地政的状況
主権　ドイツ問題　責任者／主導者　世界における経済や貿易関係の役割　民衆の関与　（選挙...）
　説得
　権威的　－　民主的...
イデオロギー
結果
成果
期間
　短期的　長期的

た。2015年9月の時期、国家的経済危機にあったギリシャの新聞に掲載された風刺画であ

った。その風刺画でもメルケル首相が描かれたいたが、なんとヒトラーに擬せられていた。しかし生徒たちは冷静に論評していた。ギリシャ人のなかにはそのような見方をする人も存在しているのだと。

授業開始からおよそ 100 分経過後、朝食（フリューシュトゥック）が始まった。生徒たちはそれぞれに水分補強し、お菓子を食べた。1 人の生徒からクッキーを 1 個もらえた。





生徒たちは、ずいぶん大人びた雰囲気で雑談しながら、休憩をとっていた。お菓子をくれた生徒とは別の 1 人の男子生徒がわたしのそばに来て、いろいろ話しかけてくれた。このような生徒たちの自己活動を重視するプロジェクト学習が、アビツアーへの準備としても、むしろ効果的であると思っていると言っていたのが印象的であった。

その後、3 人の男子生徒からなるグループが発表をおこなった。かれらが担当したのは小冊子の最初のテーマ「プロイセンによって主導された 1862 年から 1871 年までのドイツ同盟の外交」であった。生徒たちは 20 分以上、しっかりとプレゼンテーションを行っていた。エムス電報事件はとりわけ生徒たちの興味を引いていた。背後のスクリーンに投影されたのは小冊子の該当頁であったが、凛々しいビスマルクの写真と戯画化されたナポレオン 3 世のイラストが印象的であった。一方は巧妙な策略で国内世論を反仏に導いたビスマルク、

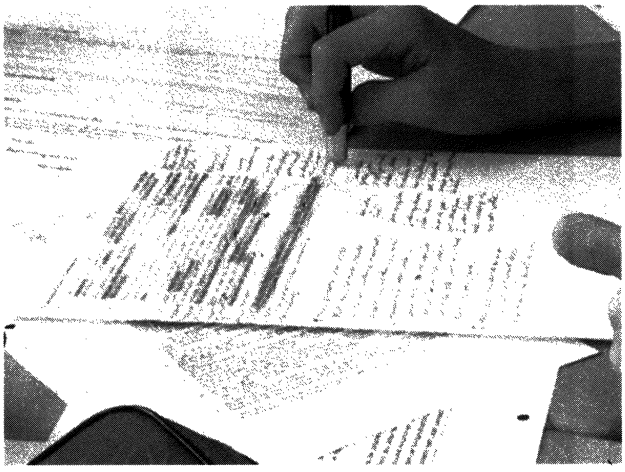
そして他方は軽率に挑発に乗り、敗れたナポレオン 3 世。両者を巧みに対比した映像資料であった。このプロジェクト授業はまだ続いていたのだが、次のクラスでの参観の予定時

間を過ぎていたので、退出した。その際、1人の男子生徒が次のクラスの教室まで案内してくれた。

3．9月10日午前－10Aクラスのドイツ語授業の参観

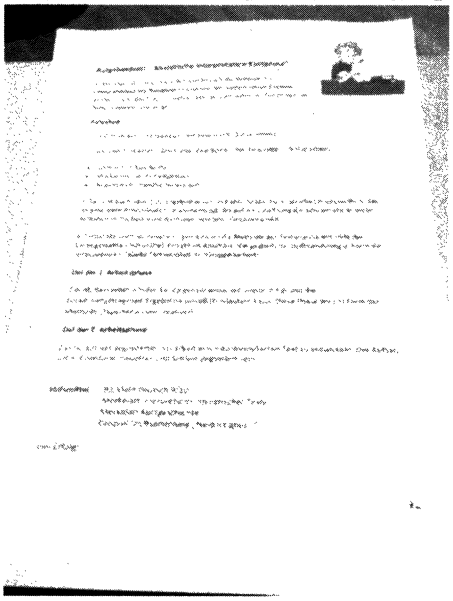
日本的に言えば“第10学年A組”となるのであろう10Aクラスに出向いた。授業は始まっていたが、担当のフェルゲントレーガー（Helke Felgenträger）先生から促されて、遅れてきたことを詫びると同時に、自己紹介を行った。わたしの自己紹介に生徒たちは笑顔と爆笑（＝わたしのジョークに反応）で応えてくれた。ずいぶん雰囲気の良いクラスであった。授業再開後、フェルゲントレーガー先生は8種類の文書を足もとに置いた。生徒たちは読みたくない文書の上に赤いカード（1人2枚）をおいた。すなわち赤いカードが多い文書は生徒たちによって拒絶されているのである。

その後、生徒たちはテキストを2つ選び、そのうち1つの分析活動をおこなった。



生徒たちは下のように、フェルゲントレーガー先生からあらかじめ分析視点を与えられている。

課題ノート「短い散文の分析的解釈」



これからの数回の授業でみなさんは、**短い散文の解釈**の方法を理解することになります。この過程の構成要素は担当教師によるインプットですが、担当教師はさらにすべての局面で必要に応じて助言します。

課題：

1．　手元にあるテキストを黙読しましょう。（個人活動）

2．　テキストをあらためて最後まで読み、そして「加工」しましょう。色鉛筆！（個人活動）

・段落分け

・印象的なことに印をつける

・欄外への書き込み

3．　それぞれの結果を互いに見せ合い、そしてどのような解答を定められた課題ノートＩに記入するのかを決めましょう。内容指示を除いて、他のすべての課題は要点だけ定式化しましょう。（グループ活動）

4．続に、皆で一緒にテキスト分析の方法を、用意されている補助教材（教科書、文学テキストの解釈の説明書、短い物語の説明書、例として教材集「嫉妬は灰色...」）をもちいて理解しましょう。続いて、あらかじめ定められた表の形式において部類分けされた教材集を作成しましょう。（グループ活動）

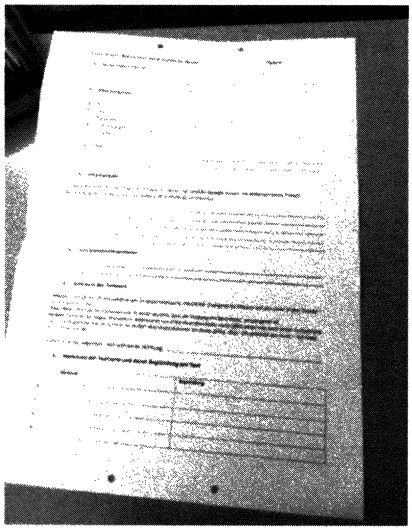
第１活動局面の目標：

目標は、どの生徒もやり方を自分のものとし、そして皆で協力して達成した成果を言葉で説明できるということである。この局面は「専門家の知識」という方法の形式において実現される。

第２活動局面の目標：

目標は、段階分けされた事前活動から、しっかりと定式化されたテキストを発展させることである。その作文は導入、主要部および結論に段階分けされている。

良き成果を！



グループ活動**「短い散文の分析的解釈」**　　**名前**

1．初めて読んだときの印象

2．概要

⇒著者 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⇒タイトル ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⇒出典 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⇒刊行場所、刊行年 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⇒語り手 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⇒テーマ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．内容報告

（5つの W の問いから導く。起こっている場所、期間と時間的順序、主役と脇役、行為の簡単な描写、簡潔に、評価なしで、現在形で）

4．解釈仮説

5． 時制の用法

現在形：距離をおかず、そして目の前にありありと思い浮かべる時間段階。現在への突然の移行は読者を出来事の渦へ引き込むはずである。

過去形：距離をおく時間段階。出来事が報告事項であること、そして過ぎ去ったことであるのは明確である。

完了形：完結している時間段階。とはいえ完了形では報告されたことはたいてい済んでおらず、そして現在に至るまで継続を、つまり今日まで影響していると思わせる。過去形ではむしろ終わっていると思わせる。

このテキストにおける時間形式とその作用

6． テキストの類型的特徴とテキストにそくしてそれを根拠づけること

1．特徴	根拠づけ
2．	
3．	
4．	
5．	

生徒たちは数種類のテキストを読んでいたが、わたしが確認できたのはライナー・クンツェ（1933－）の「15歳」およびマリー・ルイーゼ・カシュニッツ（1901－1974）の「静かな家」であった。

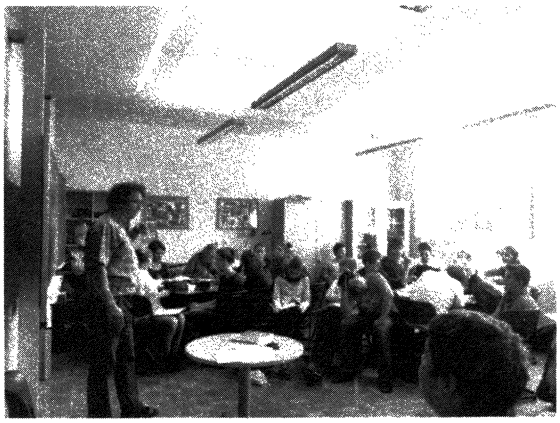
4．9月10日午後－10学年のプロジェクト「天文学」の参観

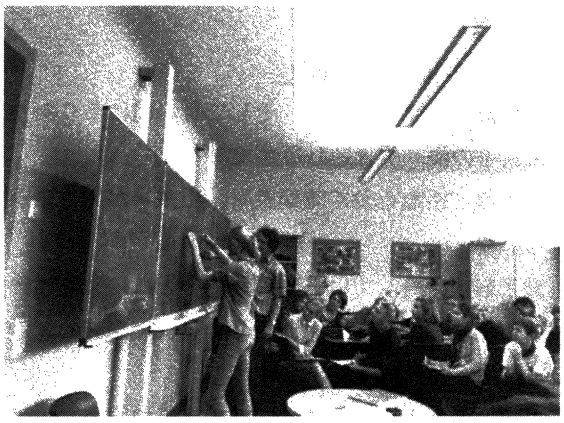
昼食後、トマス・レーアー（Thomas Röher）先生が担当なさっているプロジェクト「天文学」を参観した。当然のことだが、午前中に出会った10Aの生徒たちも出席していた。

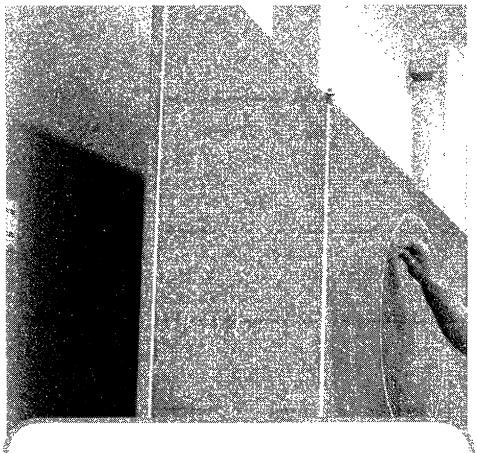
冒頭の30分ほどは黒板とチョークを使ってレーアー先生が一斉授業風に、主にケプラーの法則、第1法則から第3法則までを説明していた。

惑星は太陽を一つの焦点とする楕円軌道上を動くという第1法則については、1人の女子生徒を黒板前に招いて、作業させていた。

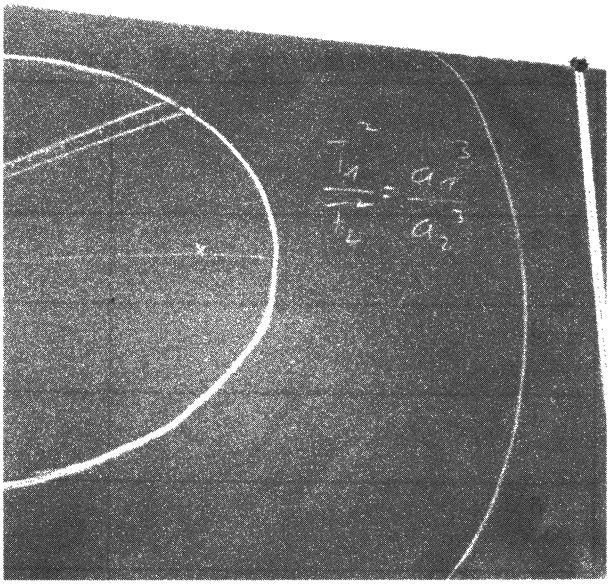
惑星と太陽とを結ぶ線分が単位時間に描く面積は一定であるという第2法則について、および惑星の公転周期の2乗は軌道の長半径の3乗に比例するという第3法則については、レーアー先生自身が板書しつつ、説明していた。







黒板の左半分に「コペルニクス、望遠鏡、世界像、ティコ・ブラーエ、ヨハネス・ケプラー」と板書されていた。



レーアー先生からいただいた資料によれば、このプロジェクトの9月の日程と翌年1月までの日程は次の通りである。

1）9月の日程：ケプラーの法則（10日）、個人活動（15日、16日）、映画「アポロ13号」（17日）、ワイドスパイヒャー劇場／個人活動局面（22日）、映画についての討論（23

日)、プロジェクト活動日（24 日）

2）住居の南側の窓から毎夜、天気がよければ、南方の空を撮影する（1 月 4 日まで)。写真をデジタル化されたデータないしプリントアウトした資料として並べて提出。

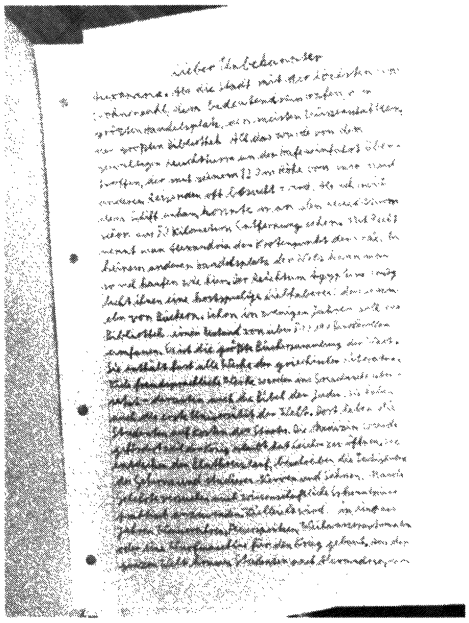
3）太陽系で興味をもつ天体を１つ選び、興味深い情報を A4 用紙半分の量でまとめ、提出する（12 月 1 日期限)。

4）クラスで追究する自由テーマ（例えば天文台訪問、プラネタリウム訪問等々）を決定（9 月 23 日までに)。

５．9 月 11 日午前－カンガルーグループの「歴史」授業参観

校長室にカンガルーグループの 4 人の子どもが迎えに来てくれ、そして教室に案内してくれた。参観したのはヤックエリネ・ツォイナー（Jacqueline Zeuner）先生とジルケ・ヴォルフ（Silke Wolf）先生が担当する歴史の授業であった。カンガルーグループは 4 年生と５年生と６年生の子どもたちで編成されている。

本日の授業テーマは古代ローマであったが、冒頭はヘレニズム時代の復習として「アレクサンドリアからの手紙」が 2 人の子どもによって発表された。ヘレニズム時代の代表的国際都市で経済も文化も反映し、（当時の）世界中から若者が学ぶためにやってきたアレクサンドリア。瓶に詰められ海に流される手紙は学生の立場で、アレクサンドリアを世界の見知らぬ誰かに紹介するものであった。一人の子どもが書いた手紙を写真撮影できたので、紹介しよう。



親愛なる見知らぬ人へ

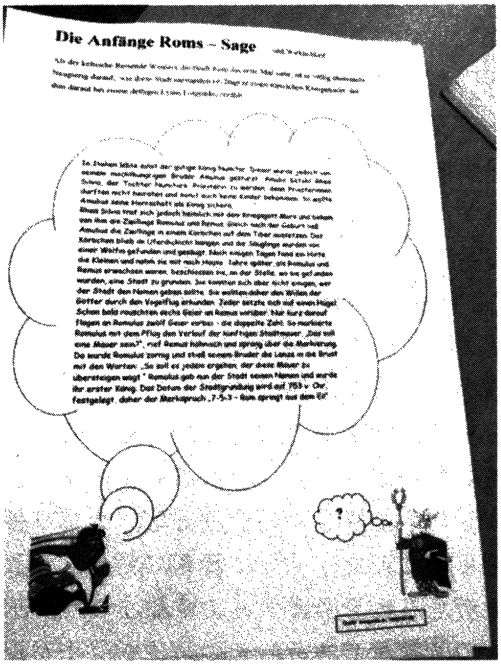
アレクサンドリア。最多の住民、最重要の港、最大の貿易地、最多の学者、最大の図書館を有する都市として。それらすべてを凌駕するのは港の進入路に位置する巨大な灯台である。それは、120mの高さなのだが、わたしも、そしてその他の旅行者もしばしば訪問する。わたしが船でやってきたとき、灯台はすでに 50km の遠方からみることができた。アレクサンドリアを地上の分岐点と呼ぶことは正しい。世界の他のいかなる貿易地においても、ここほど多くを買うことはできない。エジプトの富は高価な読書室、つまり様々な本の収集を可能にした。すでに数年の間に、図書館は 50 万冊を超える本を所蔵するようになった。世界でも最多の本の所蔵量である。その図書館はギリシャ

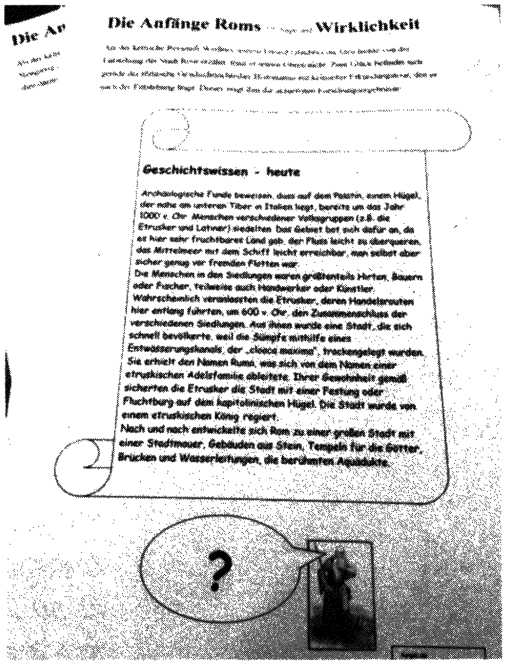
文学のほとんどすべての作品を有している。多くの外国語の作品がギリシャ語に翻訳されている　－　そのなかにはユダヤ人の聖書も。かれらは世界で最初の大学ももっている。そこでは学生たちは国家の費用で生活している。医学は奨励された。というのは国王が、死体を解剖することを許可しているから。かれらは血液循環を発見し、脳の活動を叙述し、そして神経や視覚を研究する。かなりの数の学者は学問的な認識を実践に適用しようともする。おそらくわずかな年月で、水時計、火矢、聖水自販機、あるいは戦争のための投石器が製作される。世界中から学生たちがアレクサンドリアに来る。博物館の講堂で世界の最良の学問を知るために。その学生たちが故郷に戻ると、新しい知識を、しかしまた都市アレクサンドリアの名声を広める。わたしは、この瓶に詰められた郵便の発見者がいろいろな人に、アレクサンドリアがどのような様子であるのかを語ってくださると期待する。

あなたの見知らぬ人より

その後、子どもたちは個人活動を開始した。手元のプリントに真剣に取り組んでいる。

生徒たちが取り組む「ローマの始まり—神話と実際」および「ローマの始まり－神話と実際」





ローマの始まり　ー　神話と実際

ケルト人の旅行家ヴァイスニクスはローマを初めてみたとき、かれは本当に驚いた。その都市がどのように成立したのかに好奇心をもって、かれはローマの居酒屋の主人に尋ねた。それにこたえて、居酒屋の主人は、たっぷりの食べ物でもてなしながら、次のような話をした。

イタリアではかつて、心優しい王、ヌミトールが生きていた。しかしかれは権力欲の権化のような弟、アムリウスによって倒された。アムリウスはヌミトールの娘であるレア・シルヴィアに尼になるように命じた。というのは、尼は結婚を許されず、それゆえ子どもを産むことも許されないから。そのようにしてアムリウスは王としての支配を確かなものにしようとした。

レア・シルヴィアはしかし秘密裡に戦争の神、マースと出会い、そしてかれとの間にロムルスとレムスという双子をもうけた。誕生直後、アムリウスは双子を小さな籠に入れて、テーベレ川に捨てた。小さな籠は川岸の茂みにひっかかり、そして赤ん坊たちは一頭のメスオオカミによって発見され、そして授乳された。数日後、一人の羊飼いが幼子たちを発見し、そして家に連れて帰った。年月が流れ、ロムルスとレムスが成人したとき、かれらが発見された場所に都市を建設することを決心した。かれらはしかし、どちらがその都市に名前を与えるべきかで合意できなかった。それゆえ二人は神々の意思を鳥の飛ぶ様子で探ろうとした。二人はそれぞれ別の小さな丘の上に座った。すぐに6羽のハゲタカがレムスのそばを通過した。そのすぐあと、ロムルスのそばを12羽の　ー2倍ー　ハゲタカが飛んでいった。かくしてロムルスは鍬[スキ]で将来の都市壁のラインをマークした。「そこに壁が建つの？」とレムスはバカにしたように叫び、そしてマークを飛び越した。するとロムルスは怒り、そして次のように言いながら、弟の胸に槍を突き立てた。「この壁をあえて超えようとする者はこうなるのだ」。そのようにしてロムルスは都市に自分の名前を与え、そしてその初代の王になった。都市創設の時期は紀元前753年であると定められた。したがって次のような格言がある。「7-5-3-とローマは卵から飛び出てきた！」

ローマの始まり　ー　神話と実際

ケルト人の旅行家ヴァイスニクスがかれの友人、グラウブニクスにローマという都市の成立に係る歴史を物語っているとき、実はかれは自分が聞いたことを信じていない。幸運にも、ちょうどローマの歴史家ヒストリアヌスがケルトの探検ツアーに居合わせている。ヴァイスニックスはヒストリアヌスに成立に関して尋ねる。ヒストリアヌスはアクチュアルな研究成果を教えてくれる。

歴史知識　ー　今日

考古学的発見は、ローマ7丘のひとつであるパラティーノには、その丘はイタリアのテーベレ川下流近くにあるのだが、すでに紀元前1000年頃にはさまざまな部族（例えばエトルリアおよびラテン）の人々が集落を形成していた。その領域は居住に適していた。というのはここには非常に肥沃な土地があり、川は容易に横切れ、地中海に船で簡単に出ることができたが、敵の艦船からは十分確実に自衛できた。

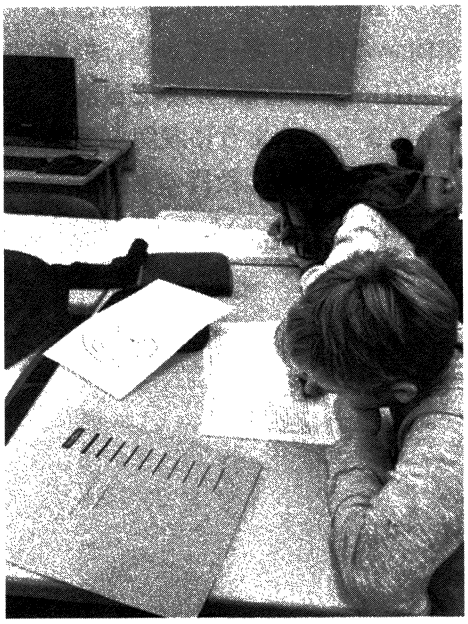
集落の住民は大部分、羊飼い、農民あるいは漁民、さらに一部は職人あるいは芸術家であった。

おそらく、その商業ルートがそれらの集落に沿っていたエトルリア人が、紀元前600年頃、さまざまな集落の結集を引き起こした。それらから都市が生まれ、急速に人口が増えた。というのは沼地が、古代ローマの運河、「クロアカ・マクシマ」のおかげで、干拓されたからであった。その都市はルーマという名前をえた。それはエトルリアのある貴族の家柄に由来した。かれらの習慣にしたがって、エトルリア人はその都市をカピトル丘の要塞あるいは脱出城によって守った。その都市はエトルリアの王によって統治された。

徐々にローマは市の壁、石でできたさまざまな建物、神々のための神殿、橋と水道、有名な水路橋を有する大都市に発展した。

生徒たちは以下の方向付けプリントをもとに学習をおこなっていた。

週計画　－　ローマが世界権力となる



ローマの始まり

２つの資料「ローマ－神話と実際」に書かれた情報を正確に読み通し、そして以下の課題に取り組もう。

神話

まずテキストを読めば、きっと次の問いに答えることができる。

１．神話によればだれがローマを創設した？

２．いつローマは創設された？

３．どこにローマは創設された？

４．神話によればローマがどのように創設されたのか、いくつかの短文で叙述せよ。

実際

５．考古学研究に関するあなたの知識を用いて空欄を埋めよう。

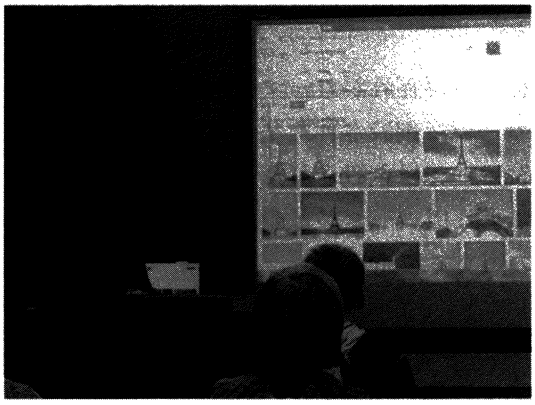
証明されていることだが、すでに（　　）には（　　）で人々が生活していた。その人々はその土地が好きだった。というのはそこでは（　　）は簡単に横断できたから。すでに以前からここには（　　）の重要な商業ルートがあった。その人たちは集落をすぐに都市へと拡張した。その防衛のためにその人たちは（　　）に（　　）を建造し、そして壁で囲った。神々のために神殿を造った。（　　）は運河であった。それによってその人たちは谷の沼を干拓し、そしてそのようにして新しい住民のための場所を可能とした。都市に十分な水を供給できるように、かれらはキロメートルの長さの（　　）を建築した。

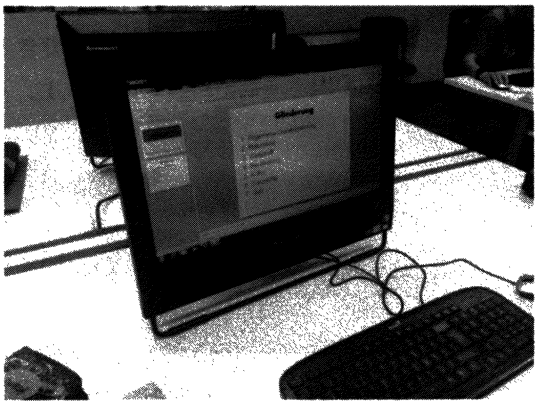
下の図表をテキスト「実際」と教科書『歴史と事象』118 頁における挿絵を参照しながら補充せよ。

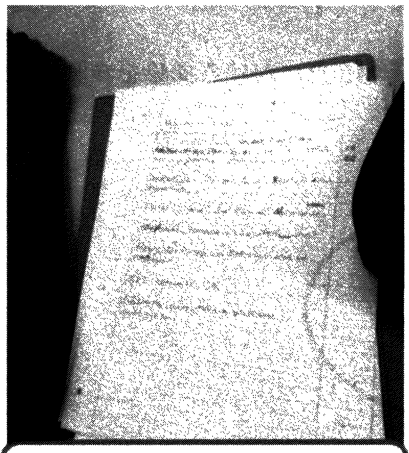
ローマの都市への発展はこれらによって促進された。

６．９月 11 日午前ーカンガルーグループのプロジェクト授業参観

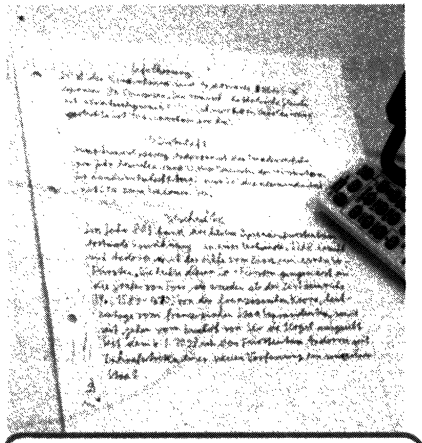
その後、校長室で休憩した後、やはりカンガルーグループの 6 年生の男の子に案内されて、コンピューター室に向かった。1 台のパソコンに 2 人が向かい合い、座っていた。担当教師によって、1 人がヨーロッパの 1 つの国を選び、その国の「①一般的特徴づけ、②自然、③経済、④人口様態、⑤文化、⑥歴史、⑦クイズ」の観点からまとめるように説明を受けた後、子どもたちはそれぞれにパソコンを用いた活動を始めた。もちろん教員の支援を受けている子どもも存在した。モナコやアンドラのような極小国を追究している子もいた。





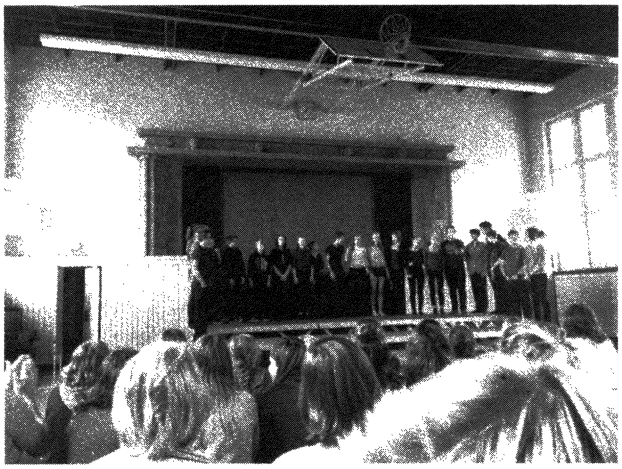


モナコ公国についてのメモ



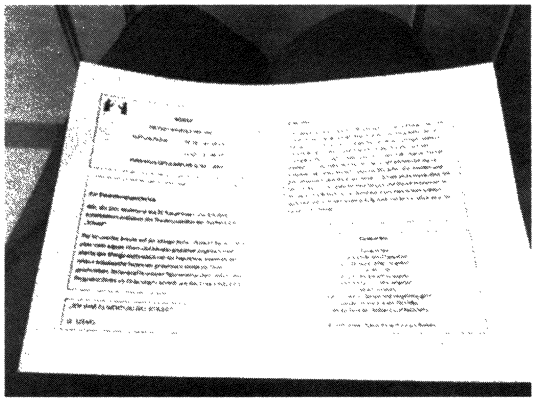
アンドラ公国についてのメモ

7、9月11日午後ー10Aクラスの演劇鑑賞



昼食後、体操ホールに出向いた。すでに「観客」である生徒たちが着席していた。そして「罪」というタイトルの演劇を披露する 10Aクラスの生徒たちはホールの壁際に立っていたり、座っていたりしていた。よく見るとどの生徒も小さな白い紙を手にしていた。10Aの生徒たちが配布した招待状であった。

13時ちょうどに10Aクラスの1人の女子生徒が登場し、ナレーションを開始した。その後、スクリーンには映像が、そして厳かな音楽が流れ、クラスの全員が一人ずつゆっくりと舞台に上がり、向こう向きに直立した。全員がそろったとき、明らかに告別式のシーンであることが分かった。いじめによって自死した1人の生徒のための告別式であった。30分ほどの短時間の演劇ではあったが、ストーリーは心を揺さぶるものであったし、生徒たちの演技は本格的で、見ごたえがあった。当然、終了時には盛大な拍手を得ていた。



罪

10Aの演劇作品

上演時間　9月9日　18時半～

　　9月11日　13時～

イエナのイエナプラン学校の体操ホールにて

この作品の誕生史について

わたしたち、10Aは、21人の生徒が在籍しているが、演劇プロジェクトに際して、「罪」という作品を発展させた。

その基本思想は「王様ゲーム」という漫画叢書にもとづく。わたしたちはしかし多くの独自の思想や筋書きを組み入れたので、漫画は結局インスピレーションとしてしか貢献してない。第1週目にわたしたちは一緒に脚本全体を書き上げ、登場人物の配役を決め、招待状として個々のプログラムノートを作

成し、そして作品を覚えこんだ。
「わたしは無関係だ！お前に罪がある！」（第 2 場面）

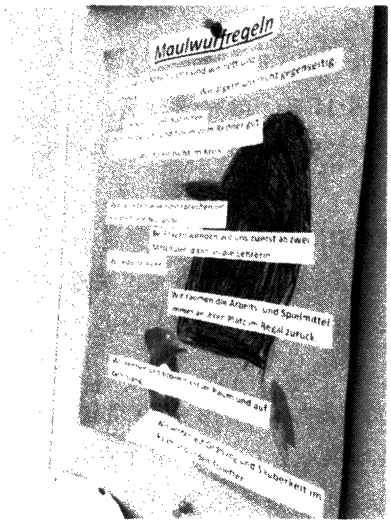
内容について

すべては 1 人の級友の死で始まる。かれのクラスはかれをあまりにも酷く追い詰めたので、かれはもはや、自死する以外の逃げ道を見ることができない。あとにかれが残したのは、深く悲しむかれのただ一人の友人および 1 通の手紙である。しかしその衝撃的な出来事の後でも、クラスのなかでほとんど変化はない。そのクラスは引き続き現存している序列や差別と闘わねばならない。一味は消極的な同調者を、疑念をもつ者を、そしてまったく特別にアウトサイダーを支配する。－　最初のミステリアスな SMS がくるまで。その SMS はあるグループのために 1 つの課題を告げる。そのグループは級友の自殺にたいする責任を自白すべきであるというものである。続いてさらに課題を続く。それらの課題は、結局、破滅をもたらす。

何千回も

何千回も
わたしはきみのせいにし、
そしてきみの体面を何千回も汚した。
何千回も
わたしはきみのせいにし、
そしてきみの体面を何千回も汚した。
わたしたちが次のことに気づくまで。
罪や体面汚しが問題になっているのでなく、
ようするに愛が、
風見鶏や打算の取りやめが問題になっていることに。
（©ウルリッヒ・シャファー【1942 年生の写真家、作家】の詩より）

まとめにかえて：自己規律と相互評価、そして美味しい給食



以上のように 3 日間、JPS を訪問し、いくつかの活動を参観することができた。生徒たちが自由で、リラックスしているにもかかわらず、実に真剣に学習に取り組んでいることが印象的であった。わたしはそのことは JPS の自己規律と相互評価の文化によるものであると思った。

例えば、もぐらグループの教室には左の写真のような「もぐらのきまり」が掲示されていた。

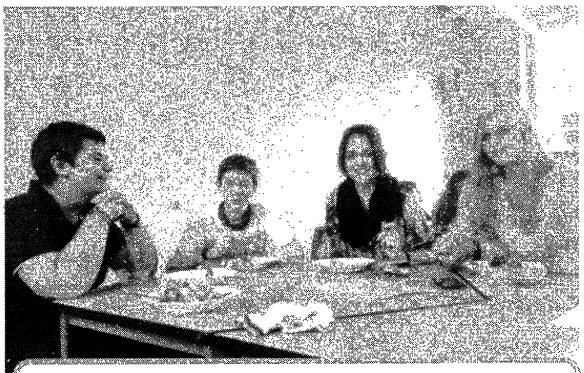
もぐらのきまり

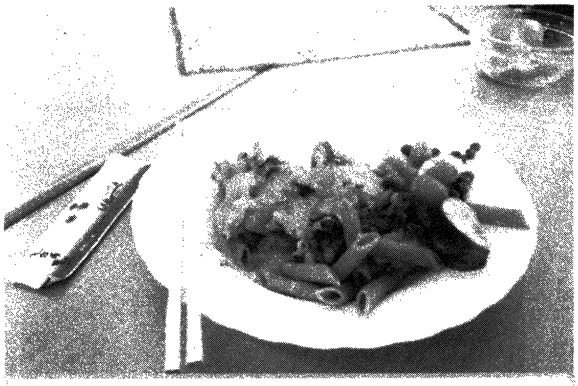
・グループの仲間にたいして親切で、親身になる。お互いに怒らない。
・輪のなかでは一人だけが話す。
・発言するときは合図をし、ひとの話をしっかり聴く。

・輪の中で邪魔をしない。
・わたしたちは静かに活動し、そしてささやき声に話す。
・尋ねたいことがあるときはまず2人の仲間にし、そのあと先生にする。
・椅子などをぐらぐらゆすらない。
・学習のための材料や遊び道具をいつもの場所に返す。
・教室や廊下を走ったり、暴れたりしない。
・教室やトイレでの整理整頓に心がける。

JPSの給食は自校給食であった。温かく美味しい給食は子どもたちの心身を豊かにするに違いない。わたしがいただいた給食を紹介しよう。(2−3種類から1つを事前に予約)

1日目はナイフとフォークで


2日目はスプーンで


3日目は日本から持参した割りばしで